

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業  
 - 小グループによる支援の試み -

小林 菜摘<sup>1)</sup> 四ノ宮 美恵子<sup>1)</sup> 水村 慎也<sup>1)</sup> 深津 玲子<sup>2)</sup> 車谷 洋<sup>2)</sup>

1) 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

2) 国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター

1. 目的

青年期において初めて発達障害との診断を受けた、当モデル事業の利用者を対象に、「他者と協同して作業をすること」を目的に、文化祭で協同して模擬店を出店するという場面を用いて、小グループ訓練を実施した。そこで、試行した段階的なアプローチによるプログラムの内容と効果について考察する。

2. 方法

1) 対象者

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業の利用者 A、B、C の 3 名。DMS- による診断名は、それぞれ、特定不能の広汎性発達障害・アスペルガー障害・自閉性障害で、WAIS- による知的機能 (FIQ) は 75 ~ 127 であった。いずれも学校生活において、行事へ役割を持ち主体的に参加する機会を得ておらず、集団での行事に参加することに対して苦手意識を持っていた。

2) 手続き

はじめに、文化祭のイメージを持ちやすいように、導入として、「お菓子を手作りし、いつもお世話になっている職員をもてなす」という作業体験の場を個別に設けた。ここでは、支援員は利用者と支援者の二者間で協力して調理し、それを第三者に提供しもてなすことで、「他者と協同して作業する」状態と、模擬店の基本的要素である「商品を提供し、客をもてなす」ことを体験的に理解することを目標に介入を行った。次に、模擬店の企画から出店までの一般的な手続きから抽出した表 1 の活動課題に関して、支援員はファシリテーター的役割を担い、表 2 の活動の手続きに則り介入を行った。各活動課題に対しては、課題の特性に応じて課題遂行場面を、話し合いの場を持つグループミーティング、または実際の作業を行うグループ作業に振り分け実施した。

表1. 活動課題

| 活動課題              | 活動課題            | 活動課題         |
|-------------------|-----------------|--------------|
| 1. 模擬店内容と店名の決定    | 9. 店内装飾の製作      | 17. 買い出し     |
| 2. 模擬店出店の目標の設定    | 10. 販売方法の決定     | 18. 接客等の事前練習 |
| 3. 活動のルール設定       | 11. 販売に必要な物の作成  | 19. 販売商品の製作  |
| 4. 当日までのスケジュールリング | 12. 展示物の内容の決定   | 20. 開店準備     |
| 5. メニューの詳細の決定     | 13. 展示物の作成      | 21. 当日の活動    |
| 6. メニュー該当品の価格調査   | 14. 宣伝広告の企画     | 22. 閉店後の片付け  |
| 7. 諸経費の算出         | 15. 宣伝広告の作成     | 23. 反省会      |
| 8. 店内のレイアウトの決定    | 16. 必要な物のリストアップ | 24. 売り上げの集計  |

表2. グループ活動の手続き

| 内容                 | メンバーの達成目標                             | ファシリテーターの介入目標  |
|--------------------|---------------------------------------|--|
| 1. セッティング          | これから展開する体験について、枠組みと目的を理解する            | 協同作業を体験するための、メンバーが主体的に活動できる場面設定を行い、これから展開する体験の枠組みの理解を促す    |
| 2. 体験              | 各活動課題に他者と協同で取り組む                      | できるだけメンバーが主体的に活動し、協同作業が進むようにメンバー間の円滑的役割を果たす                |
| 3. 個人の体験の整理        | 体験の全体にわたる人物間の関係や状況について、個人の一環した視点で把握する | 体験の全体にわたる人物間の関係や状況について組織化し、本人個人の一環した視点で整理するための個別の介入を行う     |
| 4. 他者の視点を取り入れる     | 同じ体験を共有した、他メンバーの自分と異なる視点を受け入れる        | メンバーがミーティングで個人の心的体験を語り、同じ場面で相互に異なる心的体験をしていることについての理解を促す    |
| 5. 体験の一般的な水準での意味づけ | 「他者と協同で作業する」という体験を一般的な水準で理解する         | メンバーが「協同して作業する」状態について、一般的な水準での理解ができるように促す                  |
| 6. 今後の課題の整理        | 協同作業を成功させるための適応的な行動モデルを構築する           | 個人が自身の協同作業をする際の苦手さに気付き、適切な行動モデルを、体験から構築できるように個別の介入を行う      |
| 7. フィードバック         | メンバーの苦手さや適応的な行動モデルを共有し、他者の意見や工夫を取り入れる | メンバーが、個人の課題と適応的な行動モデルについて語り、相互に適応的な行動についての意見や工夫を共有できるように促す |

・結果

200X年7月～200X年10月の約4ヶ月間に60分を1コマとし、計73コマの介入を行った。その結果、個人差はあるものの表3、表4のような気づきと行動の変化がみられた。そして、文化祭直後にメンバーが記述した感想文には文化祭の心的体験として表5のような記述が見られた。

表3. 協同作業に関する気づき

| 気づき                  | A - B - C |
|----------------------|-----------|
| 1. 男女差               | ○ ○ ○     |
| 2. 経験の差              | ● ○ ○     |
| 3. 能力の違い             | ○ ○ ○     |
| 4. 立場の違い             | ○ ○ ○     |
| 5. 相互の行動パターンの特徴      | ○ ○ ○     |
| 6. 相互の役割を理解する必要性     | ● ○ ○     |
| 7. 報告と連絡の必要性         | ○ ○ ○     |
| 8. 作業の区切りを把握する必要性    | ● ○ ○     |
| 9. 作業の分担をあらかじめ決める必要性 | ○ ○ ○     |
| 10. 作業全体の把握の必要性      | ● ● ○     |

注：項目に関する気づきがあったもの  
項目に関する気づきがなかったもの

表4. 介入後にメンバーに見られた変化

| 行動                     | A - B - C |
|------------------------|-----------|
| 1. 作業時に役割分担をしようとする     | ○ ○ ○     |
| 2. 他者の行動によって自分の行動を調整する | ○ ○ ○     |
| 3. 他者の作業スピードに合わせる      | ○ ○ ○     |
| 4. 相互に能力を補おうとする        | ● ○ ○     |
| 5. 他者の作業状況を把握しようとする    | ● ○ ○     |
| 6. 相互の作業スペースを調整する      | ● ○ ○     |
| 7. 作業時に報告・連絡をしようとする    | ○ ○ ○     |
| 8. 他者を手伝う              | ○ ○ ○     |
| 9. 他者に手助けを求める          | ● ● ○     |
| 10. 作業の全体を把握しようとする     | ● ● ○     |

注：項目に関する変化が見られたもの  
項目に関する変化が見られなかったもの

表5. 感想文からの記述

|   |  |
|---|--|
| A | 「おいしく食べてもらえてとても嬉しかったです」<br>「当日は沢山の客に買ってもらえたり、接客もうまくできてとても楽しい一日でした」           |
| B | 「お店の流れなどを考えたりして、大変でしたが、お菓子づくりや当日のお店の仕事をやったりしてすごく楽しくできてよかったと思います」             |
| C | 「買ってくれた人もみんな喜んでくれたので大成功と言えるでしょう」<br>「色々大変なことも多かったけど、楽しかったです。また機会があったらやりたいです」 |

・考察

実際の体験における自己の視点と他者の視点を整理し共有していく手続き(表2の2～4)によって介入したことで、体験の意味付けがなされ、協同作業に関する気づきが挙げられたものと考えられた。さらに、協同作業における個人の行動のフィードバックを行い、適応的な行動モデルを各自の実際の体験から再構築する(表2の5～6)手続きによって、行動の変化が生じたものと考えられた。また、他者と円滑に協同し文化祭に参加したことで、「行事に参加する」という体験が「楽しい体験」につながったものと考えられた。

今後の課題としては、今回のプログラムの結果で得られたような気づきや行動の変化が長期的に定着していくためのプログラムの検討が挙げられる。